

| | |
|------------------|---|
| Title | 経塚並に酒器についての一考察 |
| Sub Title | A type of "Sutra Mound" (経塚) in Akita prefecture and the wine vessel discovered in it |
| Author | 小野, 正人(Ono, Masando) |
| Publisher | 三田史学会 |
| Publication year | 1955 |
| Jtitle | 史学 Vol.28, No.2 (1955. 9) ,p.132(264)- 134(266) |
| JaLC DOI | |
| Abstract | |
| Notes | |
| Genre | Journal Article |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19550900-0132 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

經塚並に酒器について

の一考察

小野 正 人

昭和二十九年八月、秋田縣雄勝郡山田村松岡坊中、現在湯澤市内に編入された地區に於て、經塚が發見されて左記の出土品があつた。

三、經筒

大工 尊賀部國清

壽永三年大歲
甲辰月日

大勸進僧

大壇主尼殿

銘

四、須惠甕

口經五寸四分五厘、高一尺二寸一分五

厘、完型

五、同自然紬甕

口經七寸三分五厘、高一尺二寸一

分、半缺

六、片口型鉢

口經六寸三分、高二寸四分

以上の五點の外、刀子三、經筒の底に代用した和鏡などが出た。この遺跡は本縣の専門委員の奈良修介氏及私が調査を行つたが、以下はその調査の副産物として得た一考察である。

この遺跡は湯澤市より西へ約里餘、古い街道の北に海拔三百米の顯著な尖峰をなす白山の直下、平地より約三、四十米隆起した「構之森(甕し森)」の上に、川石を堅固

一、經筒

建久七^{大歲}卯月二日
丙辰

山北雄勝郡松岳如法

銘

藤原女人

二、經筒

本聖人

御尊前

銘

に組んで出来た塚から出土したのである。

この白山は古く、松岡寺といふ天台の古寺があり、金峯山神宮寺とも稱し、この松岡から北にあたる三輪山養老寺（現在古社三輪神社別當吉祥院）の系統の古い佛教遺跡であり、白山々頂には弘仁の白山姫命を祭つてゐる。塚のある坊中はその神宮寺の坊が十八坊あつたところといはれ、現在なほ池や庭の形をとどめ、甕の森はその主坊たる萬福院の跡の背戸にあたつてゐる。

これらの情勢、ならびに松岡寺の本寺たる養老寺が平泉藤原氏の保護をうけたこと、この一帯が古く駒形庄に屬して、陸奥の駒形社の勢力に屬してゐたことなどから押して、この遺跡が、往昔、平泉文化の餘光を蒙つてゐたことは推測しうることである。こゝにこの出土品が平泉時代の地方豪族の生活文化をものがたるもの考へられ、その重要性が認められるのである。

然るに我等の先人、菅江眞澄翁の記録、雪の出羽路平

經塚並に酒器についての一考察（小野正人）

鹿郡畫川^{びろかわ}邑の項に本出土品と軌を一にした記事が発見されるのである。

すなはち、畫川邑の佐々木治總兵衛なる翁、文化六年七月、觀音寺の古塚を堀りて左の出土品を得た。

一、經筒 久安五年己巳五月日、僧長與

二、片口蓋 口徑六寸九分、高三寸三分

三、須惠甕 高一尺二寸五分、口徑六寸三分

甕の中に銅筒を入れ、片口を以つて蓋して軟石^{かろいし}の中に穴をあけてうめてあつたのである。このすぐれたる記述者、眞澄翁の叙述によつて、吾々はこの出土品と前記のものとの酷似したものであることを知りうる。

しかも、この畫川邑は地形松岡に似て古き白山姫社を山頂に祀つてゐる。この白山姫社は修驗道にもふかい因縁を有し、本地は十一面觀世音で、この二つの遺跡の類似は意義深きものがあるう。

さて、この二つの出土品で興味を惹くのは片口で蓋さ

れた大甕のことである。

一體、多數の例からみて、經筒の外套、或は筒自體も、多くはあり合せの、比較的多く酒器等によつて代用されることが多く、却て經筒外套として特に製作せられたものは少ない。この二例でも片口蓋及び甕は家用のものを使用したものゝ如く思はれる。

特に菅江翁のスケッチでは片口の内部はうかがわれな
いが、私の實見した片口は極めて特徴的で、ロクロ目を
裝飾的につけて、ヘラで流し溝を三本刻んである。

この様式は残り粕の多い液體に用ふるもので、菅江翁
の圖には底の高台（糸切のまゝ）にヘラ書きらしく「份
」又は「例」の如き文字がみえる。徑、高等もほゞ似た
るものである。残り粕の多い液體で、且つ比較的、感覺
上賤用でない器といへば、第一に考へられるのは酒であ
る。酒器を經筒として用ひた例は極めて多く、瀬戸瓶子、
青磁、白磁、陰青等の宋磁等は甚だ多い。この思想はこ

の器が須惠であつても共通と思はれる。

白山姫社と修驗道、酒器と經筒の一類型、こゝに出羽
の國の特殊な型式を見ることを得たと解するのは不當で
あらうか。特に白山姫社はあの時代この地方の信仰を象
徴するものとして、その平地に屹立した姿、觀世音との
結合、それを通じての天台等の布教の發展、佛教文化に
結合する奥羽貴族の生活文化、等々の點に於て興味ふか
い示唆を與えられるのである。

前號正誤表

| 頁 | 行 | 誤 | 正 |
|-----|----|-----------|-----------|
| 一一四 | 14 | 「東海道。」 | 「東海堂。」 |
| 一一五 | 2 | 「東海道。」 | 「東海堂。」 |
| 一一五 | 13 | 「東海道。」 | 「東海堂。」 |
| 一一九 | 3 | 「浮世繪五十年史」 | 「浮世繪五十年史」 |